

平成10年度定例会発表要旨

平成10年
◎5月27日

城壁のある街
——中国都城の景観——

尾形 勇

すでに拙著で触れたことであるが（『中国文明の誕生』中央公論社、1998年）、中国の都市は、古来、大なり小なり城壁で取り囲まれていた。そして一般庶民、古くは農民たちまでもが、この城壁内に居住していた。こうした「城郭都市」（都城）の構造は、中央アジアからヨーロッパにかけての方面では、むしろ普遍的なものであるかも知れないが、中華文明の影響を多大に受けてきたはずの日本では認めがたい特徴であり、中華文明の特質として、また東アジアの都市の成立を考える際にも留意すべき1点である。

中国の都市の起源は、華北の黄土地帯に散在して出現するムラ（邑）に求めることができる。陝西省の半坡や姜寨に代表される新石器時代の集落遺跡では、小高い丘に十数から百戸ほどの掘っ建て小屋があり、その周囲は比較的小さな河川と壕（からぼり）をもって防御されている。やがて黄土地帯に相応しく、日乾しレンガを積み重ね、または版築の手法をもって土牆が廻らされるようになる。新石器時代末期の「平糧台遺跡」（河南省淮陽県）で発見された幅が10メートルほどの版築の土牆がその最古クラスの例である。この場合の土牆は、ほぼ正方形であり、この「方形プラン」は、以後の中国の「城郭都市」へと受け継がれ、礼制上の平面プランもまた「方形」であった。

ちなみに、城壁が一部であれ曲線を描くのは、古代では後漢～北魏時代の「漢魏洛陽城」の東北隅のみに見られ、南京（江蘇省）、杭州（浙江省）などの首都クラスの都城が、自然の地形にそって自在な形で城壁が廻らされるのは、中世（宋代～）以降のことであった。この変容の背景には、古代的な政治理念の崩壊という時代の転換が認められる。

王朝国家とは、無数の邑が結ばれ、強力で巨大な大邑がそのネットワークの支配のカナメとなる体制の成立を意味する。商（殷）周時代の「邑制国家」の誕生である。この時代の都市のプランは、支配者層の居住区と官衙が中心であり、その周囲にはさらに堅固な城壁（内城）が構築される。人々の居住区は、この内城の外側、外城の内側に儲けられたが、都市の成長にともなって城内が手狭になると、外城が拡張された。それでも間に合わなくなると、外城の一回り外側に城壁が廻らされ（外郭城）、または外城に接して「別城」が設けられた。

楊寛氏の近年の研究によると（西嶋定生監訳、尾形勇・高木智見共訳『中国都城の起源と変遷』学生社、1987年）、その内城は、当初は外城の西南の隅に位置していた。これは西南部を最も尊い場所とする礼制的観念に基づくという。前漢の長安城はその系譜を守ったが、後漢の洛陽城では内城が中央部に移り、北魏の時代になって、中央北側に内城はまとめられた。かの隋唐の長安城における内城（皇帝の君臨する宮城と官衙の皇城）の位置は、その変遷の延長上にある——というのが楊寛氏の卓論である。

「解放」以後、とくに最近の「現代化」の推進

によって、中国の都城の姿は、大きく変貌している。明清時代ころからの「なごり」を留め、城郭がよく保存されているのは、山西省平遥市、安徽省寿县、遼寧省興城市くらいである。私も訪ねたことがある平遥の街は、山西商人の経済力が築いた巨大な「城郭都市」であり、古都の風情を楽しむことができる。ただしこの都市とて、「自治都市」へと発展する方向をたどることはなかった。これまた中国の都市の変遷からうかがえる中国史の特質の1つである。

平成10年

◎5月27日

後撰集と大和物語

——和歌の感情度の高低をめぐる——

佐藤和喜

和歌は通時的に見ると、ハイテンションのものからローテンションのものへと変容すると言うことができるが、この感情度の高さ低さということは、同時代的にも共存し得るものである。例えば、古事記の、

大君を 島に放らば 船余り い帰り来むぞ
わが豊ゆめ 言をこそ 豊と言はめ わが妻
はゆめ

は、兄妹相姦を犯した軽皇子が追放される時に歌ったと語られているが、日本書紀では、2句が「島に放り」となっており、相手の軽大娘皇女が流される時に軽皇子が歌ったと語られている。記では、上2句は軽皇子を大君と呼ぶ第三者的な表現であり、下6句は軽皇子本人の、追放されても必ず帰ってくるぞという激情表現である。第三者的な人の立場から当事者的な神の立場に転位しているのである。一方、紀では、「大君」は軽大娘のことであり、軽大娘を島に放って帰ってくるから妻は身を慎しんでいよと言っている、転位のない歌になっ

ている。軽皇子は軽大娘を運ぶ船頭の身になって歌っているのであり、追放される当事者の歌である記に比べて、第三者の歌として感情度のはるかに低い歌になっているのである。

同様のことが後撰集と大和物語の間にも見られる。例えば藤原兼輔の、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にま
どひぬるかな

は、集では、相撲の還饗の後の貴人数人の宴席で子供のことが話題になった時に詠まれた歌と語られているが、物語では、娘を入内させた兼輔が娘のことを思って天皇に詠み贈った歌と語られている。集では、貴人が宴席で子供のことを話して酔い泣きをする、身を逸脱する激情が表現されていることになるが、物語では、入内した娘の父として娘を思い、天皇に娘をよろしくと依頼する、身に従う心の表現となっているのである。源公忠の、

玉匣ふたとせあはぬ君が身をあけながらやは
あらむと思ひし

にも相似た相違が見られる。集は、小野好古が叙位に漏れたことを嘆いてきた手紙に返事を書いた、その手紙の裏に書きつけた歌だと語っている。公忠の手紙と歌とは、表と裏の関係になっているのであり、手紙文で好古の昇進が叶わなかった経緯と同情を記した公忠は、それではおさまらない思いを歌に込めているのである。その身からあふれ出る思いの表現である歌によってこそ、荒れている好古の心は鎮められるのである。一方、物語は、叙位のことをどうなったか気にかけていた好古に、公忠が歌で叙位漏れを告げたことを語っている。歌は激情の表現ではなく、相手に事実を知らせるハイポジション・ローテンションの表現となっているのである。

檜垣の姫の歌の場合も同様である。集は、大式藤原興範に水を乞われた檜垣の姫が、

年経ればわが黒髪も白河のみづはくむまで老
いにけるかな